

3-5 ウエペケレ「オコッコ チャペ アライケ」解説

語り手：貝澤とうるしの
聞き手・解説：萱野茂

萱野：これは okokko cape a=rayke [化け物猫を退治した]

貝澤：okokko cape [化け物猫]、そうよ。

萱野：だな。okkoko cape a=rayke [化け物猫を退治した]

貝澤：okokko cape, kim un cape [化け物猫、山の猫]。

萱野：私は石狩の浜近くで住む一人のアイヌでした。私たちの村近くでは、何一つ不自由なく村も平和に暮らしておったのです。

けれども、アイヌ語では hemtomaniwano [この頃] と言って出ていますが、この頃札幌の方へ行くアイヌたちがどうしたのか、札幌へ行くと言って出て行っても、札幌へ到着したのも聞かないし、まだ札幌の方から石狩の方へ来ると言っても、それがこちらへ到着しない、と。そういうことを聞いてその途中で何かその恐ろしい事がきっと起きているのではないかと。そんなふうに考えたので、一度調べに行かなくちゃ、と。それを考えておった。

どうしてもまだ……この頃も「そうであった」というふうに聞いたので、ある日のことひそかに kamuy nisuk [神に頼む] をして、神様を作って、これから札幌の方へ行く、と。途中で何か恐ろしい事があるのかも知れませんが、どうぞ守って下さるように、と、神様にそんな事をお願いしたり、犬も、いい犬を二頭持っておった、と。その犬たちにも inaw [イノウ、木幣] を作って、首に巻いてやり、これから札幌の方へ行く。

しかし、途中何か恐ろしい化物がきつとおるはずだから、よく注意して、主人である私を守るように、と言い聞かせて、神様、それぞれたくさんの神様をお願いをし、犬にも inaw をやって、ある朝早く出発をした。

そして、札幌の方に向いて出かけたら、もう村も近くなったらしく、犬の吠え声とか、あるいはなんとなく人里近い感じしておる所へ来ると、自分より先に歩いておった犬が、何かこの場合アイヌ語で maw tutturi と

いう表現を使っていますが、

貝澤：何か臭いすることだな。

萱野：その何かの別の臭いを嗅いだらしく、犬が立ち止まって、鼻をヒクヒクさせながら、その辺り臭いを嗅んでおった。ちょっと進んでは止まり、ちょっと行っては座るといふうな仕草を繰り返しながら、進んで行くと、何かしら前の方へ大きな木の上へ黒いものが見えた。そこへさして犬は一斉に走り出した。よく近寄って見ると、それは大きな犬ぐらいもある大きな猫であった。

その猫を見つけて、犬たちは吠え立てていると、すると猫の方も上から逆襲して降りようとしたんだけど、そうこうしておるうちに、犬にその猫が引きずり降ろされるようにして、降りてきた。そして、二匹の犬に噛み殺された。まあ、その間にはいろいろこう喧嘩とか格闘とかしながら、その猫を犬二匹で噛み殺してしまった。よくまあ考えてみると、確かにこの猫は持ち主があるんじゃないか、と。だから、その持ち主の所へ行って、**caranke**〔談判〕付けてあれしなくちゃと思ひ、そしてその化け猫というか、山猫に縄を付けて引きずるようにして、札幌の村さして歩き出した。

そうすると、ちょっとその立木から向こうへ行くと大きなドロノキの風倒木があった。その下には、人間の骨、いわゆる猫に食い殺され、そして肉のところは食われて、骨ばかりが、もう山のようにその木の風倒木の下にはあった。それを見ながら札幌へ行って、たくさん何軒かあるうちでも、普通の家でなく **kamuytono** と言って、いわゆる偉いシャモ〔和人〕のようなうちの家、偉いそこの殿様らしい家の所へ入って行って、そしてこの猫は知らないか、と言うと、殿様は「いや、まことに申し訳ない、と。それは私の持っておった猫だったのに、途中から見えなくなって、そういう悪さをしておったということは、本当に済まない、と。」アイヌ何人も、まあ人間、男五～六人と女二～三人殺した、と。だから、その事で、何とていうか、償いをしてくれ、と。強硬に **caranke**〔談判〕をした。

そしたら、その殿様は非常に物分りのいい人で、「それではその死んだ人たちに食べ物も着物も与えますよ。どうぞ、一つ許して下さい。」と、非常に穏やかに話をしてくれたので、死んだ人たちの家族とかそうした人には、食べ物とか着物とか与えるように話をして、私も私のうちへ帰ってきて、その後は、何一つそうした心配も無く村が平和に暮らしておりました。

だから、そういう猫でも、あまりよくない猫を長く養うとか、そういう

事はしないようにと、一人のアイヌが言って、そういう事を言いながら世を去りました。これは **aynu uepeker** [人間の散文説話] ですけれども、いわゆる札幌という地名が出たり、あるいは猫という比較的新しい時代に北海道へ入ったのではないかと、思われる、ものでもこういう物語として出てくるあたりに、何か珍しいというような感じの **uepeker** [散文説話] です。